

人と防災未来センター

ボランティアコーディネーターコース 実施結果

「防災とボランティアの週間」にあたる 1 月 19 日から 21 日の 3 日間、人と防災未来センターでは、市民向けとしては初めての研修となる「ボランティアコーディネーターコース」を実施、兵庫県内外から 25 人が参加した（当初定員 20 名）。

1. 講座のねらい

阪神・淡路大震災以降、大規模な災害が発生すると「災害ボランティア」が駆けつけ、救援・復旧活動に参加するようになった。こうした動きを受けて、多くの自治体が、災害ボランティアの受入体制を検討している。他方、各地の民間団体も、多発する災害への対応を通じて、救援活動のノウハウを蓄積してきている。

人と防災未来センターでは、こうした民間の支援を被災地に効果的に導入するノウハウ（知識と実践）を収集・整理し、それらを実践に活かせる人材の育成を目指して本コースを設定した。

コースの対象としては、全国で実際に災害救援・復旧活動に参加してきた（する予定の）団体（NPO/NGO）の関係者を想定して募集を行った。

2. コースの概要

震災以降、被災地の外部から支援に駆けつけて来る人々も含め、大勢の「善意」を被災地のニーズにつなげていく有効な仕組みの一つとして、ボランティアコーディネーターを配した「災害ボランティアセンター」の設置・運営のあり方が検討されてきた。初年度にあたる今年、この「災害ボランティアセンター」を設置・運営していくために必要な知識とノウハウを獲得することをメインテーマとして、以下のようなプログラムを実施した。

初日：1 月 19 日（月）

初日のテーマは「阪神・淡路大震災に学ぶ」。まず、人と防災未来センターの上級研究員から、災害時におけるボランティア活動を広い視野から捉え、行政や企業活動とどのように関わり、どのような役割が果たせるのか 等、大きな見取り図が提示された。その後、同センターの語り部ボランティアから、震災後の活動・体験が語られ、センターの展示を見学し、震災直後の状況を追体験した。

続いて震災当時、ボランティアに関わる部署で活躍した行政・社協・生協・医療専門職の講師から、「あの日」それぞれの立場でどう対応したのかが報告された。その後、神戸市長田区に場所を移し、震災復興まちづくりの現場を視察、住民を支援してきた市民団体から、復興の困難さや事前に必要な備えについて報告を受け、意見交換がなされた。



【防災未来館の展示見学】



【パネルディスカッション】

2日目：1月20日（火）

翌日は、丸一日かけて、今年度のメインテーマである「災害時のボランティアセンター設置運営」を、全員参加の演習にて実施した。講師は、阪神・淡路大震災からの教訓を地元名古屋市での水害対応や他の災害被災地での救援活動に活かしてきた「レスキューストックヤード」のスタッフ3名に依頼した。午前の演習では、過去の災害で実際にあった事例「今日のニーズは300名分なのに、すでに500名のボランティアが並んでいます。どう対処しましょう?」「被災者支援のため、携帯電話を100本寄贈したいのですが。」「ボランティアに行った息子にいい加減帰るよう説得して欲しい。」などを取り出しながら「ボランティアコーディネーター」としての対処の仕方について、活発なグループ討議を行った。午後は、午前の議論をさらに発展させ、理想の「災害ボランティアセンター」とはどのような機能を備えておくべきか等、KJ法によるワークショップを通じて考察を深めていった。



【ワークショップ前の講義】



【ワークショップの結果報告】

3日目：1月21日（水）

初日と2日目のプログラムでは、災害発生後の対応に焦点が当てられてきたが、3日目はこうした事後対応を可能にするために、普段の活動の中で何ができるのか、「これからの備え」に焦点を当てられた。まず、災害・防災ボランティアとして、防災や減災に焦点をあてた地域活動を日常的にどうこなしていけるのか、また、ボランティア自身のメンタルケアはいかにあるべきか、等について講義が行われた後、全員参加の討論会にてそれぞれの現状や問題点について意見が交わされ、今後とりくむべき課題の共有が図られた。



【パネリストによる取組み報告】



【全体討論の風景】

3. コースの特徴

(1) 推進体制

本コースの大きな特徴は、主催者である人と防災未来センターと、震災の被災地で復興を担ってきた、また全国で災害救援活動を行ってきた市民活動者・団体（NPO / NGO）が、企画会議を持ちながら協働してプログラムを創り上げてきた点である。

多発する災害への対応を通じて、民間団体も救援活動のノウハウを蓄積していることは上述したが、民間の支援を効果的に被災地に導入していくためのプログラムを企画するに当たって、こうした民間団体の蓄積を継承していけるような運営推進体制づくりが必要であった。

こうした体制づくりは、まず人と防災未来センターのコース担当者が、2003年8月から、講座の企画のために開始した関係団体へのヒアリングを通じて進められた。最終的には、2003年10月に、下記の6団体の関係者の協力により、コース内容（プログラム）を検討していく体制を発足させることができた。

この企画会議では、具体的に以下の内容について検討を行った。

- プログラム概要（講座のねらいと受講対象など）の検討
- コース運営の推進体制について
- カリキュラムの検討
- 講師の選定
- 当日の運営にかかる役割分担

企画会議に参加した協力者（以下、企画委員）には、同時に、講義・演習・パネルディスカッションの講師も依頼した。各企画委員は、担当した講義・演習の内容や運営についても関係者と個別に打合せを行い、それらの内容をメール等にて他の企画委員や人と防災未来センターの事務局に提供し、相互に情報の共有を図っていった。

こうした市民活動団体の参画・協力によって、震災以降の災害対応を通じて蓄積されてきた民間の知識とノウハウが系統的に継承され、プログラムの作成に活かされていった。

(2) ワークショップ形式の演習の導入

また、企画委員は、直接担当していない講義・演習にも積極的に出席し、グループディスカッションを促進（ファシリテーション）するなど、受講者の学びを側面から支援するといった役割

も果たした。本コースでは、現場で役に立つ知識やノウハウを習得してもらうために、参加型の体験的学習＝ワークショップ形式の演習を多用してきたが、こうしたワークショップが可能になったのも、企画委員が常に研修に出席し、臨機応変に対応してもらえたことに負うところが大きいことが大きかったと言える。特に「演習」という、受講者自身が考え受講者同士が互いに交流を図ることができる「場」に、経験豊富な企画委員が加わることによって、より多くの情報が共有され、全体での意見交換を促進することになった。

主な企画協力団体（ 50音順、敬称略）

震災がつなぐ全国ネットワーク
 日本災害救援ボランティアネットワーク（NVNAD）
 阪神高齢者・障害者支援ネットワーク
 ひょうご・まち・くらし研究所
 被災地 NGO 協働センター
 レスキューストックヤード

4．受講者の評価と今後の課題

今回の受講者募集にあたっては、ボランティア活動ないしは災害救援活動の経験者を想定したコースであることを明示した上で、兵庫県内外を問わず広く募集を行った【表3】。その結果、北は関東から南は九州まで、遠隔地からも多数の参加者が得られた。受講者の所属団体も多岐にわたっており、災害に関わるボランティア団体やネットワークの関係者が最も多いものの、各種の民間団体（助成財団、生協、YMCA、社会福祉協議会など）のスタッフをはじめ、医療関係の専門職など、幅広い分野からの参加があったことがうかがえる【表2】。

また、受講者には、各講義及びコース全体を通じた「評価レポート」を提出してもらった。

「すぐ実践に使いそう」「演習が大変良かった」「まち歩きは神戸ならではの」「参加者も一緒になって創り上げていくという部分が多く感じられた」という自由記述からは、企画時に設定した「ねらい」がある程度満たされていたことがうかがえるが、他方で、プログラムの合い間に「時間が足りない」「一つ一つの講義にもっとじっくり取り組みたかった」「消化不良」といった声も聞かれた。人と防災未来センターでは、こうしたコース修了者の評価を、来年度以降のコース企画に反映させていく予定である。

本コースの企画運営を通じて、人と防災未来センターが、災害に関わる市民・組織同士をつなぎ、それぞれの知恵を継承しつつ、それらを広く社会に提供していく「場」となれる可能性を有していることを確認できた。講座への参加や企画運営を通じた人材のネットワークが、災害時に直接役に立つネットワークとして機能することを期待したい。

【表1】受講者の年齢と性別

	20代	30代	40代	50代	60代	不明	総数
男性	1	4	4	4	3	2	18
女性	0	2	1	0	0	4	7
総計（実人数）	1	6	5	4	3	6	25

(N=25)

【表 2】受講者の所属

	災害 専門 V 団体	V 団体	公益的な民間 団体	防災関 連一般 企業	専門 職	その 他	総計
兵 庫 県	2	1	1			1	5
近畿（兵庫県除）	3	2		1	2	2	10
東 北 地 方							0
関 東 地 方	1		2	1			4
中 部 地 方	2						2
中国・四国地方							0
九 州 地 方	1	2					3
海 外	1						1
総計（実人数）	10	5	3	2	2	3	25
団 体 数	7	5	3	2	1	3	21

(N=25)

【表 3】受講者の活動経験

活動 経験 年数	V 全般	比 率	災害 救援 活動	比 率
未 経 験	4	4%	7	12%
1 年 未 満	1	4%	3	4%
3 年 未 満	1	16%	1	4%
5 年 未 満	4	12%	1	8%
5 年 以 上	3	8%	2	12%
阪神大震災以降	2	16%	3	8%
阪神大震災以前 よ	4	16%	2	28%
回 答 ナ シ	6	24%	6	24%
	(25)		(25)	

(N=25)

次回のボランティアコーディネーターコースは、平成 16 年夏～秋頃に開催予定です。
皆様のご参加をお待ちしております。